

「初心忘るべからず」と『宗鏡録』

重田 みち

「初心忘るべからず」は、世阿弥伝書『花鏡』奥の段の言葉として著名である。今もこの表現が広く用いられるが、これは『花鏡』に記されているからこそであろう。但し、現代の「初心」が初志・初心を表すのに対し、世阿弥の「初心忘るべからず」の「初心」とは、芸の未熟な状態を指し、例えば「是非初心忘るべからず（長所欠点を問わず、芸の未熟だった時期の状態を後年になっても忘れるな）」などと説く。

さて、「初心忘るべからず」は従来、世阿弥の考案・独創に係るものではないかと思像される向きがあった。「初心」自体は中世において珍しい言葉ではないが、「初心忘るべからず」という一連の表現が当時の文献には見出し難いことが、その理由であろう。また世阿弥がこの言葉を『花鏡』に掲げるに際し、「当流に、万能一徳の一句あり」と、自前の句であるかに読める前置きをしていることも、そのような想像を促したであろうか。

しかし、「初心忘るべからず」に近い表現は、実は世阿弥以前の文献にも見出される。それは、中国禪の法眼宗の僧である永明延寿（知覚禪師）の編集に係り、北宋の建隆元年（九六一）に完成した『宗鏡録』である。同書は中国の諸書を涉獵し、禪以外の諸宗と禪とを融合させ、諸宗の教義を体系的に説いたもので、全百巻から成る極めて大部の著である。元版大藏経に収められており、日本独自の本としては、南北朝時代の禅僧、春屋妙葩の命による、応安四年（一三七一）開版の五山版がよく知られている。同書は大半が問答体で書かれているが、その巻一に、仏陀の意を汲むことのみが目的のはずの禪の宗派にあつて、なぜ本書の如く、諸宗の言葉を用いた指南が必要であるかの問が掲げられている。その答は長大なものであるが、その中に「初心始学之者」について述べた部分があり、『花鏡』の「初心忘るべからず」と近い表現が見られる。左にその一部を書き下し文に改め引用

する。

初心始学之者は、未だ自省の發せざる已前、若し聖教正宗に非ずんば、何に憑りてか修行し進道せんや。設し自ら妄見を生ぜざれば、亦た乃ち尽く邪師に値はん。〔中略〕帝王親づから師となり、朝野歸命す。叢林則を取り、後学稟承す。〔中略〕凡そ疑を積み偽りを去ること有らんとし、性を顕かにし、宗を明らむ。一一広く經文を引き、備さに仏意を彰かにせざる無し。永く後嗣に伝へ、家風を墜さざらんとする所以なり。〔中略〕又若し仏乘を研究し、宝藏を披き尋ねんと欲せば一一須く自己に消帰せしめ、言言をして真心に冥合せしむべし。但だ義上の文を執り、語に随ひて見を生ずる莫れ。直だ須く證下の旨を探り、本宗に契会すべし。則ち無師の智現前し、天真の道味からず。〔中略〕慧身を成就せんとすれば他悟に由らず。故に教へに助道の力有らんことを知る、初心安くんぞ暫くも忘るべけんや。法利の無辺なるを細詳にし、是に乃ち搜揚し纂集す。〔原文は大正新脩大藏経卷四十八、四一九頁上—中に拠る〕

右傍線部が当該部分（原文「初心安可暫忘」）である。この「初心」は、仏道を初めて志した時の心、即ち初志・初心と解せられ、現代と用法を同じくする。また、右引用部

分はやや回りくどい説明であるが、その「初心」に應えることが同書執筆の目的であることを述べている。

同書の日本における注釈としては、鎌倉末期から南北朝にかけての禅僧、志玄無極による『色塵集』三十卷（伝未詳）が五山版開版以前の書として知られるが、開版の約二十年後にも、後に將軍義持の帰依を受けた禅僧、愚中周及が抜粋『稟明抄』（明徳四年奥書）一卷を著した。また『宗鏡録』が大部であるため、応永九年、岐陽方秀が明僧一庵にその大義作成を依頼したことが、『不二遺稿』所収の書簡控によって知られる。つまり『宗鏡録』は、五山版が開版され南北朝から室町初期にかけて、世阿弥との交流が認められる岐陽を含め、禅僧を中心とした識者の間でかなり話題に上った書であることが想像される。

また、右に引用した「初心安可暫忘」は、冒頭近くの第一問に見え、撰述者の意志が特に強く表れた文言であり、大部な同書の中でも目に付きやすい。したがって、世阿弥伝書の「初心忘るべからず」が、『宗鏡録』の右の文と何らかの関わりを持つ可能性もあると思われる。

但し、世阿弥の用法と異なり、『宗鏡録』の「初心」は、初志・初念の意に解せられる。こちらの用例は中国に多く、日本にお

いても近代以前の同様の用例は、漢文体に限られるようである。いったい日本における同語は、仏道に入ったばかりの時期、芸道に未熟な時期、またそのような時期に在る人物に対して用いられることが多く、「初心の者」「初心の程」等の表現または単に「初心」で、そのような人物を指すこともある。『宗鏡録』の先の引用冒頭「初心始学之者」と同用法である。世阿弥伝書の他の箇所にも散見する「初心」の用法も基本的にこれに則る。

また、『花鏡』奥の段には「初心を忘るるは、後心をも忘るるにはあらずや」ともあり、「初心」に対する「後心」の語が用いられる。この「後心」は「初心」のように一般に用いられた語ではなく、「初心」と対をなす仏語として伝わったらしい。早く『摩訶止観』等に用例が見え、禅籍にも用いられ、岐陽も「初心全与後心同」（初心全く後心と同じ）云々という偈を残している（『不二遺稿』）。これは、『花鏡』奥の段の説が禅の影響を受けたものであることを示すものであろう。

ところで、「初心忘るべからず」の類似表現として、「不可改其初心」という言葉が、野間子苞が編纂した『俗語録』（寛文四年自序）の「初心」の項に、『修真伝道集』を出典として記される。『修真伝道集』は宋代の

編纂と見られる道教經典の一方で、明代の正統道藏にも、『修真十書』の内『鍾呂伝道集』として収録されている。この「初心」は初志・初念と解され、『宗鏡録』「初心安可暫忘」の「初心」と基本的な意味を同じくする、やはり中国での用例である。また村田了阿の編纂に係る『俚言集覽』（江戸後期）は『俗語録』の右の例を引き、「俗語の初心」は「是義と異也」と記すが、「俗語の初心」とは、芸道などに未熟な人物の意を示すと思われる。一方、近代に入ってから例としては、徳富蘆花『不如帰』に「初心を破らじ」があり、この「初心」は初志・初念を指す。漢文的な用法の「初心」が「初心を改めず」「初心を破らず」などの形で近世から近代に受け継がれてきたのであろう。後に昭和に入り世阿弥伝書が一般に注目されるようになってからは、同意の表現が「初心忘るべからず」の形で普及したのではあるまいか。『花鏡』の同句はそれらと意を異にするものではあるが。

（立命館大学非常勤講師）